

鉱山とドイツの思想家たち

Mines and thinkers of Germany

上野 ふき^{1*}, 比屋根均¹

Fuki Ueno^{1*}, Hitoshi Hiyagon¹

¹名古屋大学大学院

¹Nagoya University

「美しい鉱山は可能か？」18世紀ドイツ・ロマン主義の詩人ノヴァーリスの言葉である。グリム兄弟の『ドイツ伝説集』によれば、鉱山にはキリスト教に支配されない不思議な力を持った妖精がいるか、古代の女神が住んでいる。ドイツにおいて鉱山は単に厳しい労働の場ではない。そこは魂の象徴とも言うことができる。その理由には古代ギリシアからヨーロッパに流れる科学観が影響している。

たとえば、古代ギリシアから中世まで、鉱物は有機物であるか無機物であるかという議論が絶えず行われてきた。タレスやピュタゴラス学派は石が靈魂を有すると考え、初期プラトンやアリストテレスは鉱物に霊的な性質を見て取った。ローマの自然観では、鉱山はしばらく放置しておく生産性が上がると考えられた。中世になると、鉱物と魔術の関係が論じられるようになり、石には霊性が、宝石には魔力が備わるとされた。その考え方は錬金術師らに受け継がれ、鉱物、宝石の知識は魔術にとって不可欠なものとなった。このように鉱物は無機物としてではなく、有機体の延長上に存在する“生物”として考えられていた。

ドイツでは、中世からルネサンス期ごろまで鉱山業は大地のはらわたをえぐりだす汚らわしい職と考えられていた。しかし、鉱山学の父アグリコラの『デ・レ・メタリカ (1556年)』出版以降、知識人たちの鉱山に対する態度とイメージが変化している。数学者でもあり哲学者でもあるライプニッツは、安定したエネルギーの確保のために風車とダムの開発を目指していた。ドイツ古典主義の詩人ゲーテは、当時最新の水揚げポンプを導入して銀山再開発に取り組み、ノヴァーリスは高い製塩技術を持っていた。その後のドイツでは、鉱山学の講義を取り、鉱山をめぐる知識人が少なくない。そして、鉱山は神聖なものが住まう場所、異世界への入り口として、彼らの作品に登場する。

以上のように、その時代の最新の技術が導入される鉱山業に、哲学者、思想家、詩人が開発者として関わっていたという事実は非常に興味深い。そこで本発表では特に下記の思想家を取り上げて、1、当時の採掘技術や自然科学観 2、鉱山から影響されたであろう彼らの思想 3、鉱山に対するイメージの変遷をたどる。

- ・グリム兄弟の『ドイツ伝説集』
- ・パラケルスス(A. T. Paracelsus 1493-1541)
- ・ルター (Martin Luther 1483-1546)
- ・アグリコラ (Georg Agricola 1490-1555)
- ・ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz 1646- 1716)
- ・ゲーテ (cc 1749-1832)
- ・ノヴァーリス (Novalis 1772-1801)

ちなみに現在、ドイツの多くの町では、鉱山は観光スポットとして公開されている。博物館や施設を回るだけでなく、20ユーロ程度で1時間から2時間の坑内見学もでき、週末は夫婦や家族連れでにぎわっている。